

演題 10 は肝シンチと CT を用いて検討した結果、肝細胞癌の腫瘍倍加時間は約 4 か月であったという。このことは治療効果の判定にも役立つと思われる。

7. HBs 抗原測定の新規性に關する検討

村木 秀樹 谷 良弘 小野塚 新
 国松 治 中沢 政司 新妻 伸二
 (新潟県立ガンセンター・放)
 筒井 一哉 佐藤 幸示 (同・内)

HBs 抗原測定の新規性はカットオフ値と比較して行われるが (D 社のオースリア II-125) 検体 cpm をカットオフ値で除した値は同時新規性は良好であるものの (CV=5.2%) 測定間新規性の CV=27.6% と大きい。そこで測定間新規性を良好とするため、キット中の陽性コントロールを標準液 (20±5 ng/ml) とみなし、これをカットオフ値の 20 倍 (20 単位) と設定して検量線を作製し、これより検体 cpm を代入して単位数を読みとった。この数値はカットオフ値の何倍という意味はうすれるものの、この方法により同時新規性の CV=5.1% 測定間新規性の CV=11.1% と原法に比し、良好な新規性が得られた。

8. 核医学的検索が有用であった肝 FNH とと思われる一症例

小倉 浩夫 (勤医協中央病院・放)

Focal Nodular Hyperplasia (FNH) は肝良性腫瘍のうちで比較的稀なものであり、しかも腫瘍の性質から判断して核医学的検索が有用であった症例を経験したので報告する。

症例は 48 歳女性、経口避妊薬の服用歴なし。昭和 52 年 8 月子宮筋腫の剝出術、この頃より肝機能障害を指摘され、慢性活動性肝炎と診断されていたが、昭和 56 年になり AFP が上昇、肝シンチにて肝門部に円型の RI activity の増加部を認める。胆道シンチにて同部位の RI activity の増加を認める。血管造影では、門脈相で円形の径 4.7 cm の均一な濃染像を得た。超音波、CT、腹腔鏡では腫瘍は描出できなかった。腫瘍の経過が長く、しかも大きくなっていないことなどから、FNH として手術はせず経過観察中である。

9. $^{99m}\text{Tc-Sn}$ コロイド肝シンチにて肺描出を示した症例の分析

白土 博樹 伊藤 和夫 古舘 正従
 入江 五朗 (北大・放)
 斉藤知保子 小柴 隆蔵 (市立札幌病院)

肝スキャン施行例にて肺描出の認められた症例を肺描出のないコントロールと臨床的データに基づき比較検討し、以下の結果を得た。

1. 肺の取り込みを示した 41 例中 10 例 (24%) control 49 例中 2 例 (4%) が検査後 30 日内死亡を示し、肺の取り込みを示した群は 30 日内死亡率が有意に高かった。
2. 肝スキャン施行時の血清コリンエステラーゼ異常低値率は、moderate+marked>mild>control の順に高く、肺描出程度と相関を示した。
3. 30 日内死亡率は、非悪性疾患においては、肺描出群と control 群に有意差を認めなかった。

10. 肝細胞癌の腫瘍倍加時間 (tumor doubling time) について

小田野幾雄 武田 敬子 飯田 洋子
 秋田 真一 日向 浩 原 敬治
 酒井 邦夫 (新潟大・放)

過去 5 年間に発見された肝細胞癌のうち、臨床的に肝癌と診断されるまでに 2 回以上の肝シンチまたは肝 X 線 CT 検査を施行しえた 8 例を対象として、肝細胞癌の倍加時間を算出した。算出方法は Collins の方法による。

腫瘍倍加時間の最短は 73 日、最長は 143 日で、その平均は 114 日、標準偏差は 29 日であった。一般に肝細胞癌の倍加時間は、約 4 か月前後と推測された。

11. 食道機能の核医学的検査 (2)

—RI ボーラス移行時間とキモグラフ—

奥山 信一 三品 均 (東北労災病院・放)

食道機能の異常は、食道透視のほか、放射性ボーラスの嚥下運動をシンチグラフィで追跡しても把握できる。ROI を通過する時間を、FWHM の形に表現する試み